

WLC主催 2013年度グローバル・レクチャー・シリーズの報告



2013年11月13日(水)、WLC主催のグローバル・レクチャー・シリーズに石田光氏を迎え、講演していただきました。石田氏はカルフォルニア大学を卒業し、現在はご自身が2006年に

創設した株式会社夢道s(ユメミチス)の代表取締役として活躍されています。夢道sは日本にいる留学生の就職を支援するための会社で、これまでに、(株)三菱東京UFJ銀行、(株)東芝、(株)JTB、ドイツ銀行などの会社に600名以上の留学生を紹介して就職に導きました。この功績が称えられ、経済産業省より「ダイバーシティ促進事業表彰」、また、東京都より「経営革新優秀賞」を受賞されています。

講演で石田氏は、壁にぶつかった時こそ問題を可能性ととらえ、乗り越えていくこと、また夢を実現させるためには目標に集中することが大切だと訴えられました。冒頭では、海外から見ると、近年の日本の経済状態が大きく変化していること、ま

た人生の長さを年数ではなく、時間に計算すると人生がいかに短いかということをお話されました。さらにアメリカ留学中に大きな影響を受けた一人の教師との出会いについて触れられ、その教師から「枠の外で考えること」と「変化には、小さい単位での変化とパラダイムシフトでの大きな変化の2つがあること」を学び、そしてその結果「卒業後にはパラダイムシフトを開始したい」と決意して帰国したことを話されました。

次に、見慣れているものを新しい方向から見ることの重要性を指摘され、問題を違う観点から見ることで解決方法を見出すことができた例を1つ紹介されました。現在、高齢化に伴い年配者の一人暮らしが増えており、一方、留学生は住居を探すのが非常に困難です。そこで、この2つの問題を融合させ、一人暮らしをしている高齢者の家に留学生をホームステイさせることで2つの問題を同時に解決できた、と。そして、同様のアプローチによって、日本にいる「難民」が抱える諸問題も解決できないか、現在模索されているとのことでした。

最後に、問題にはさまざまな相互関係があることに気づくことが大切であり、時間は限られていることから、一人ひとりが解決したい問題を選び、取り組んでいかなければならないと強調して、講演を結ばれました。

英語による講義の実践方法 プロフェッショナル・ディベロップメント セミナー

創価大学は、日本および全世界から集まった学生を「世界市民」へと育成する指導的役割を担う拠点となるべく、先進的な試みを続け、H26年度からは全学部において英語による専門科目の講義が始まります。しかし、教員はそれぞれの専門分野におけるエキスパートである一方、英語を使用した講義では、それが教員の母国語でない場合には、特有の問題が生じるケースも見られます。

そこで、長年にわたって、実践に即した教育方法に基づき緻密に計画された英語カリキュラムを提供してきたWLCが、各学部で新たに開設される英語科目の一層の充実・強化に役立ててもらうために、昨年11月6日に「プロフェッショナル・ディベロップメント・セミナー」を開催し、「学生主体の教育法に基づくアプローチを成功させるためのストラテジー」の紹介を行いました(講師はラリー・マクドナルド、マルコム・ダガティー、ヴァレリー・ハンスフォードの3名)。

ラリー・マクドナルドは、新たな洗練されたリーディング法へと学生を導き、熟達させることを目的とした「足場かけ(scaffolding)」の効用、つまり、難解な学術英語の読解を進めていく際にガイドの役割を果たすような質問をすることで、非常に困難なチャレンジであっても、学生の不安を和らげつつ、読解を続けさせることが出来ると紹介しました。

次いで、マルコム・ダガティーは、学生が自分で読んだテキストをより活用させるのに役立つ「ジャーナル・ライティング」を用いたアプローチを紹介しました。これは学生を知識を受け取るだけの受動的読者にせず、彼らの知識に対する反応をさまざまに使用するアプローチです。ジャーナルは学生に講義で使用するテキストと対話することを促し、かつ読んだテキストを参照しながら自分自身の見解をまとめ上げていくことを可能に



セミナーで実践例を紹介する3名の講師

します。

最後に、ヴァレリー・ハンスフォードは、ライティングやリーディングだけではなく、基本的な会話方法にも構造化が必要であることを指摘しました。それは学生の英語による会話力を深化・定着させ、考えなくても英語のフレーズが自然に出てくるような会話力を身につけさせるのに役立ちます。学生に「アクティブリスニング・フレーズ」を提供することで、会話をよりナチュラルなものにし、英語における会話の流暢さをさらに発達させるよう導くことができます。

21世紀は真の世界市民教育のため、有意義で洗練されたカリキュラムを提供することがますます求められています。そうした中、このように学内で教育に携わっている教員が、それぞれの専門知識やストラテジーを共有することは、これからも創価大学が学生のための教育の最先端であり続けることを保証していくと確信しています。